

虚構の慰めに惑わされ

作詞 J'Soul (浅羽一)

テレビからの甲高い声が 体の周りで手を繋ぎ跳ねる姿に
一人の淋しさを忘れて笑い声を重ねた
部屋の隅から垂れ流しの歌声は
冷たい壁に反射して 混沌の渦を巻いていく
確かに大きな音量なのに やけに耳には遠く聞こえて
意識の欠片は渦に吞まれて 深い闇へと落ちていく
夢と現^{うつつ}の狭間のまどろみで 霧がかかった頭が認めた
やけに鮮明な幻覚に手を伸ばす
指先が輪郭に触れた瞬間 それは幻と気付くのに
形ばかりの日々を重ねて
一日ごとに体は錆びてく 心は朽ちてく
全て緩やかに漂うままに
力のない波に吞まれて もがく気力すら溶けて流れた

暗い部屋に向かい一人 『ただいま』を呟く虚しさは身に染みでいて
固い靴音と鍵音だけが冷たく響く
重い仮面を脱ぎ捨てて息を吐く
生^{なまぬるい}温い外の空気が 体にまとわりついている
形を持たない他人^{ひと}の名残を 想像の腕を振って散らす
疲れた頭は意味を結べず 歪んだ幻覚が笑う
善と悪との境目を探して そこで佇めば楽でいられる
目の前に現れた分厚い壁から
問いかけられた意味も考えはせず 目を逸らして耳を塞いで
すれ違う温もりを目で追い
後ろを振り返り また前にあるものを見逃す
何度繰り返す悪循環
最早傷の痛みにも慣れ 幸せを求める意味も忘れて

予定もないのに当たりもしない天気予報を睨む
終末の晴れた空に何となく誘われて 行き先も決めず街に出た
嬉しそうに腕を組む恋人達の影に重なり 昔の自分がこっちを睨む
思わず目を逸らしてうつむいた自分に ただゆっくりと頬を歪めた

行き交わす笑顔がまぶしくて
忘れていた痛みを 瞳の奥に思い出した
見えない涙を風がぬぐう
いつの間にか歩き出していた …まずは部屋の片づけでもしようか